



T-II・T-IIIレースで優勝した福本公一の③フェアレディ240Z。

で静かに座っている。しかし立っているだけで体のシンまで冷える寒さのため、センシティブなBMWエンジンが快調にまわってくれかどうかが一番の心配。

正午になって、遅れに遅れたスケジュールがやっと始動、1時間遅れて開会式が行なわれた。第1レースのミニカーがズラリとル・マン・スタイルに並ぶ前で、横山達氏を競技長に迎え、武智勇三(コース委員長)、塩沢三子夫、それに招待された3人のドライバーが観客にあいさつ。ひとりひとり紹介されると、スタンドから「キャー、ビュー」と口笛が飛ぶ。レース・グリーン紹介の時が一番大きな声援が飛ぶところあたりは、富士とまったく変わることはない。競技長の横山氏はご存知、黒沢元治の敵腕マネージャーとして有名で、10月15日に黒沢がヨーロッパへ立つ直前の時間をさいてやって来ており、「身体ひとつじゃもたないよ」。

GCマシンは野呂山でバレード

《Mクラス》 開会式も無事終了。いよいよ西日本オールスター・レース第3戦の第1レースがスタート。21台のミニカーが短いストレートに並んだ様は壯観というより窮屈そう。横山競技長が日章旗を振り降ろすと、グリッド2番めの河内真治(⑩ホンダZ)が飛び出す。つづいてポールポジションの青木健一郎(⑩フロント・クーペ)、太田誠一(⑩ホンダZ)らが好スタートを切った。しかし⑩青木のフロント・クーペは他のマシンよりチューニング度がかなり高いとあって、またたく間にトップに立ち、以後一度もその座をおびやかされることなく優勝を飾った。

狭いコースに20台ものマシンがゴチャゴチャに走りまわり、抜き

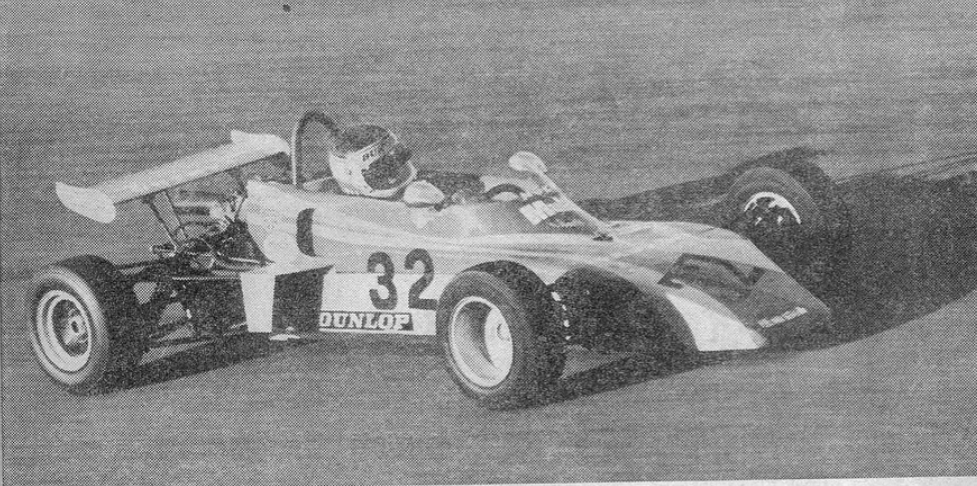
つ抜かれつの大熱戦を繰り広げるため、ピットクルーも若干とまどい気味。同じ周に、「残り5ラップ」とか「残り6ラップ」とか異なるサインボードを出してあわてたりする。30周を走り切ったのは3位の山根勉(⑩ホンダZ)まで。序盤2〜3位を走っていた⑩河内は1周遅れの4位に落ちた。優勝した⑩青木のタイムは29分16秒0。

《結果》 1位 青木健一郎(⑩フロント・クーペ) 29分19秒0 2位 瀬良健一(⑩ホンダZ) 29分19秒6 3位 山根勉(⑩ホンダZ) 29分57秒3 4位 河内真治(⑩ホンダZ) 5位 門田志郎(⑩ホンダN) 6位 中本健吾(ホンダZ)

《T-Iクラス》 Mクラス終了後、GCマシンのエキジビジョン走行ははさんで行なわれたのはT-I(1300ccまで)レース。レースは小河原金平(⑦サニー・クーペ)と牧本幹男(⑩サニー・クーペ)、村井雅博(⑩サニー・クーペ)、児島謙二(⑩サニー・クーペ)らの接戦になったが28周めのストレートで見島が強引に小河原を抜いてトップに立ち、30周を最初に走り切った。その抜きっぷりはあまりに強引で、見ている者をさえ一瞬ドキッとさせるありさだだった。

《結果》 1位 児島謙二(⑩サニー・クーペ) 26分43秒6 2位 小河原金平(⑦サニー・クーペ) 26分43秒6 3位 村井雅博(⑩サニー・クーペ) 26分44秒2 4位 牧本幹男(⑩サニー・クーペ) 5位 木村孝範(⑩サニー・クーペ) 6位 山崎義行(⑩サニー・クーペ)

《T-II・T-IIIクラス》 予定よりわずかず時間の遅れが生じて、このT-II、T-III混合レースも1時間以上遅れてスタートし



Fクラス・レースを制した新井鍾哲⑩マルチFJ。

た。ここでも圧倒的にサバンナRX-3が優位を占めていたが、福本公一の駆る③フェアレディ240Zがただ1台ロータリー勢に果敢に挑みかかった。このフェアレディが思いのほか速かった。川崎弘通(⑩カベラ)、政井武雄(⑩サバンナ)、中村修司(⑩ロータリー・クーペ)らのロータリー勢を1周ごとジワジワと引き離し、スタートから1度もトップの座を他の車に明け渡すことはなかった。2位には黒に塗られた川崎の⑩カベラが、約5秒遅れて飛び込んだ。

《結果》 1位 福本公一(③フェアレディ240Z) 26分07秒7 2位 川崎弘通(⑩カベラ) 26分13秒5 3位 政井武雄(⑩サバンナ) 26分21秒4 4位 中村修司(⑩ロータリー・クーペ) 5位 緒方隆夫(⑩サバンナ) 6位 村中一成(⑩ロータリー・クーペ)

《Fクラス》 風は一向に止まず、日はすでに西に傾き、メインレースのクラスがスタートを切るころには観客の数もかなり減っていた。午後4時45分、13台がグリッドにつき、横山競技長の打ち振る日章旗を合図にスタートしていった。まず飛び出したのは水谷敬一(①ベルコ96A)、つづいて富士GCでも活躍する新井鍾哲(⑩マルチFJ)が道う。はるばる遠征の林将一(⑩ハヤシ706)はスタートでエンジンがかからず押ししかけて走り出すが、どうも調子があがらない。そして4周め、トップを走ってオーバー・スピードになりすぎたのが第1コーナーを曲がらないでアウト側のタイヤの山に突っ込んでしまった。しかし自力でコースに戻り、再び走り始める。

トップは①水谷をかかわした⑩新井が4周めからグングン飛ばし、約51秒のラップで周回を重ねる。レース中盤の15周めには2位水谷との差は9秒2にもなった。その後は差は開くいっぱい、新井の独

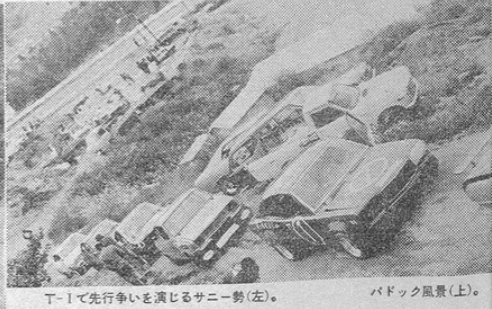
走をこぼむ者はだれもいなかった。2位には水谷、3位には戸田RS-1の⑩石崎恒行がはいった。

《結果》 1位 新井鍾哲(⑩マルチFJ) 25分26秒 2位 水谷敬一(①ベルコ96A) 25分45秒 3位 石崎恒行(⑩戸田RS-1) 4位 桂雄二(①マルチFJ) 5位 今井正明(ハヤシ706) 6位 高木久男(⑩マルチFJ)

こうして日もとっぷりと暮れた野呂山に、西日本オールスター・レース第3戦の幕はおりた。予想メンバーがそろわず調子の狂ったGCマシン・エキジビジョン走行は失敗(?)に終わったが、メインのFJレースを中心としたM、T-I、II、IIIクラスのレースは熱気につつまれて成功のうちに終えることができたようだ。ところでここ野呂山スピードウェイでのGCマシンの走りっぷりは、富士では見ることのできない面白さがあった。各車ともスタート前は「腹をこするのでは? タイヤがあわないのでは?」といろいろ心配していたが、いざコースに出るとまったくそれ以前の問題が残っていた。米山二郎は真黒に塗ったシェブロンをコースに持ち出したのだが、エンジンはウンともスンともいわない。

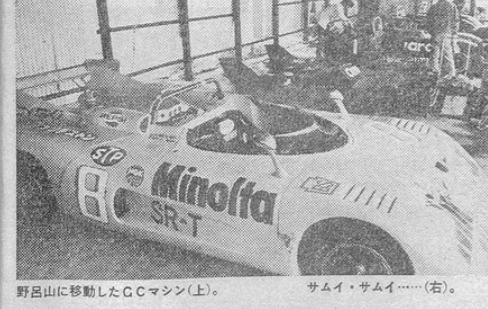
鮎子田もその仲間。まったくクラッチの切れないシェブロンで、酒井マーチと一緒にスタートしたまではよかったが、3周するとメーターリング・ユニットのゴッド・ベルトが切れてしまいストップ。レッカー車に引かれてストレートに姿を現わした。けっきょく酒井マーチがただ1台、黙もくと10周を走り切り、野呂山の観客にも「マーチBMW強し!」の印象を与えたと見るのは早合点?

(レポート/赤井邦彦:写真/岩田泉・中山敏美)



T-Iで先行争いを演じるサニー勢(左)。

バック風景(上)。



野呂山に移動したGCマシン(上)。

サムイ・サムイ……(右)。

